ジブリの森のえいが
ちゅうずもう
スタジオジブリ作品
STUDIO GHIBLI

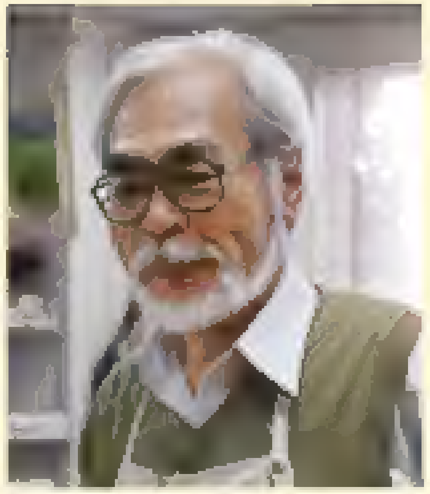
ジブリの森のえいが

ちゅうずもう

原作:日本民話より　企画・脚本:宮崎 駿　絵コンテ・監督:山下明彦
語り:阿川佐和子　音楽:渡野辺マント
制作:スタジオジブリ　上映時間:12分55秒　©2010 Studio Ghibli

ごあいさつ

●企画・脚本● 宮崎 駿



私たちの国に伝わる昔話や民話を、楽しいアニメーションにできないものでしょうか。

昔話や民話をもとに描かれた絵本やアニメ作品は、すでにいくつも作られているのですが、私のように関東に生まれ育って今も暮らしている人間には、昔話の舞台になる「むかしむかしある所に…」の所が見当たりません。ジブリのスタジオがある小金井市も、わたしの住む所沢市も、江戸時代にようやく開拓された武蔵野の荒野だった場所です。

今も残っている農家や古い写真を見ても、とても昔話や民話の舞台になる風景は見あたりません。昔話によくあるカヤ葺きの家があって、松の木があって、おまんじゅうみたいな山のある風景は関東には見あたらないのです。そんなことを考えたりしているうちに、宮本常一さんというすぐれた民俗学者の本に出会いました。宮本常一さんは日本中をよく歩いて、よく見て、よく考え、たくさんの人々の話を聞いて、たくさんのすぐれた本を残してくれた人です。

その中に、たんぼ(水田)のない山の村の人々のごちそうについて書いたものがありました。水田がないので稲はつくれません。稲がとれなければ米も手に入らず、お餅をつけません。いったい、山の村の人々のごちそうってどんなものだったのでしょう。

豆腐は大豆から作ります。味噌も自分でつくります。味噌にくるみを入れてスリバチですって、甘味は干柿か、里からちょっぴり買って来た大事な砂糖を入れて、豆腐にぬって囲炉裏でこうばしく焼きます。里芋をゆでてクシにさして、これも焼きながら味噌ダレをぬります。なんともおいしそうなのです。それに海からはるばる運ばれて来た塩ザカナ。塩をうんとつけて、いたまないようにしたサンマは、塩がとても貴重な、山の人々にはおおごちそうだったのです。

長野の南の山の中に下栗という里があって、急な山肌に今も村があります。とても景色の良い所で、そこの宿で出る小さなジャガイモはとってもおいしいし、しいたけは空とぶ円盤のように肉が厚くて、これも見事です。昔話の『ねずみのすもう』を下栗のような山の里を舞台にしてアニメーションにしたら、きっとおもしろくなる!!

噂にきく塩サンマを入れたダンゴ(おやき)はどんな味がするのか、きっとねずみ達は、においだけでもうクラクラして、ちょっぴりかじっただけで幸せになって元気百倍になると思う。そしたら白いお餅を食べるよりも力が湧いて、すもうにだって勝っちゃうかもしれないじゃないか…。

そんなわけで、わたし達の『ちゅうずもう』ができました。みなさんが、この映画を楽しんでくださるととても嬉しく思います。

なお下栗の里にロケハンに行ったスタッフは、本物のサンマダンゴを食べて「香ばしくて、とてもうまかった」と言ってました。

むか〜し、むかし、

ある山の奥のまた山のオヘソに、
ジイとバアが住んでおったと。
ジイとバアは、くる日もくる日も
山の畑を登ったりおりたり、
登ったりおりたり。
ぐだぐだに、くたびれて
暮らしておったと。
なあ〜んにもおもしろいことは
なかったと。

ある晩のこと。
ジイはションベンがしたくって目が覚めた。
ああ、そうか。
今夜はねずみのすもうの晩か。

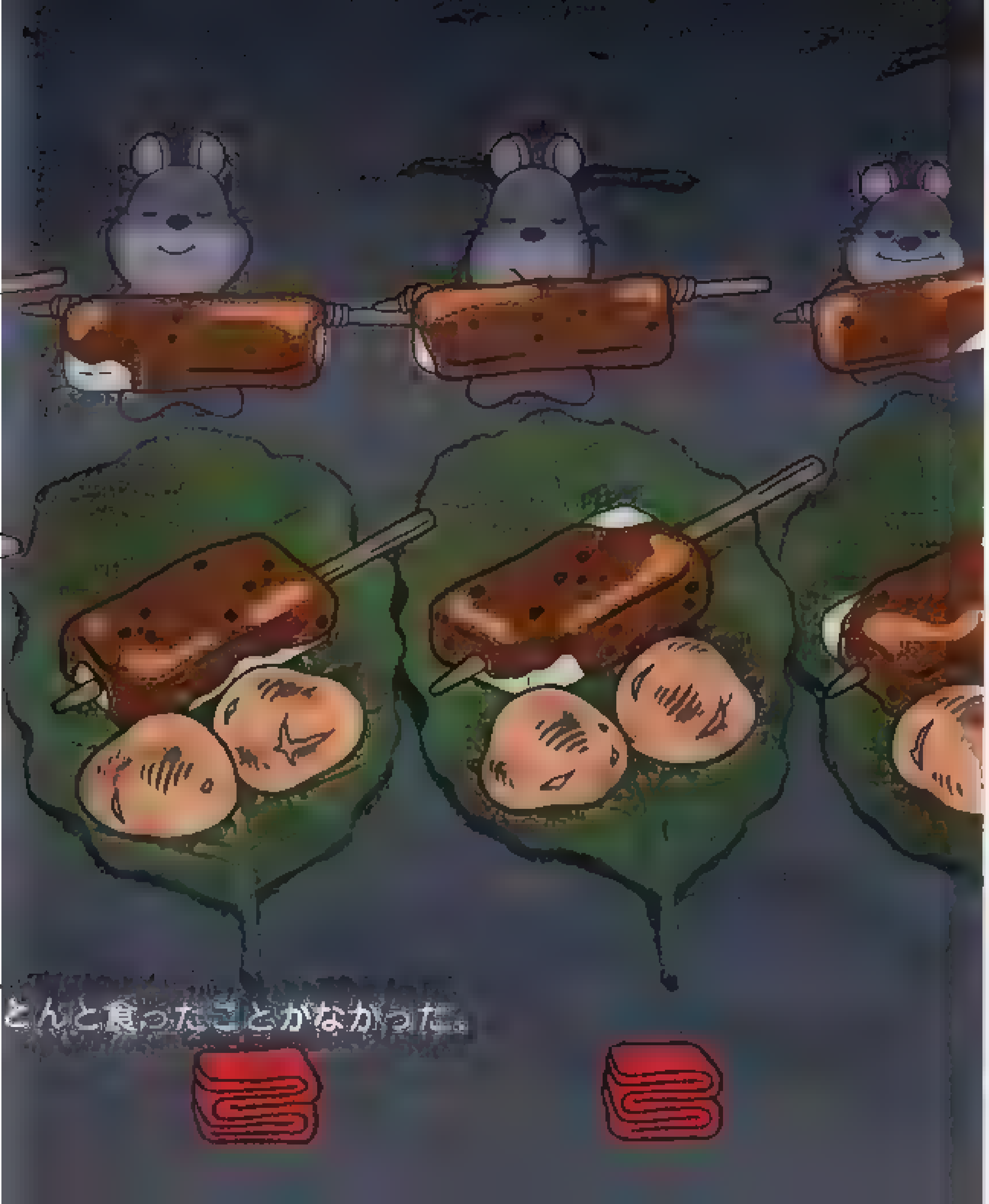
ありゃあうちのねずみ共だぞな。
やっとる、やっとる。
おっ、うちのねずみが上がったぞ。

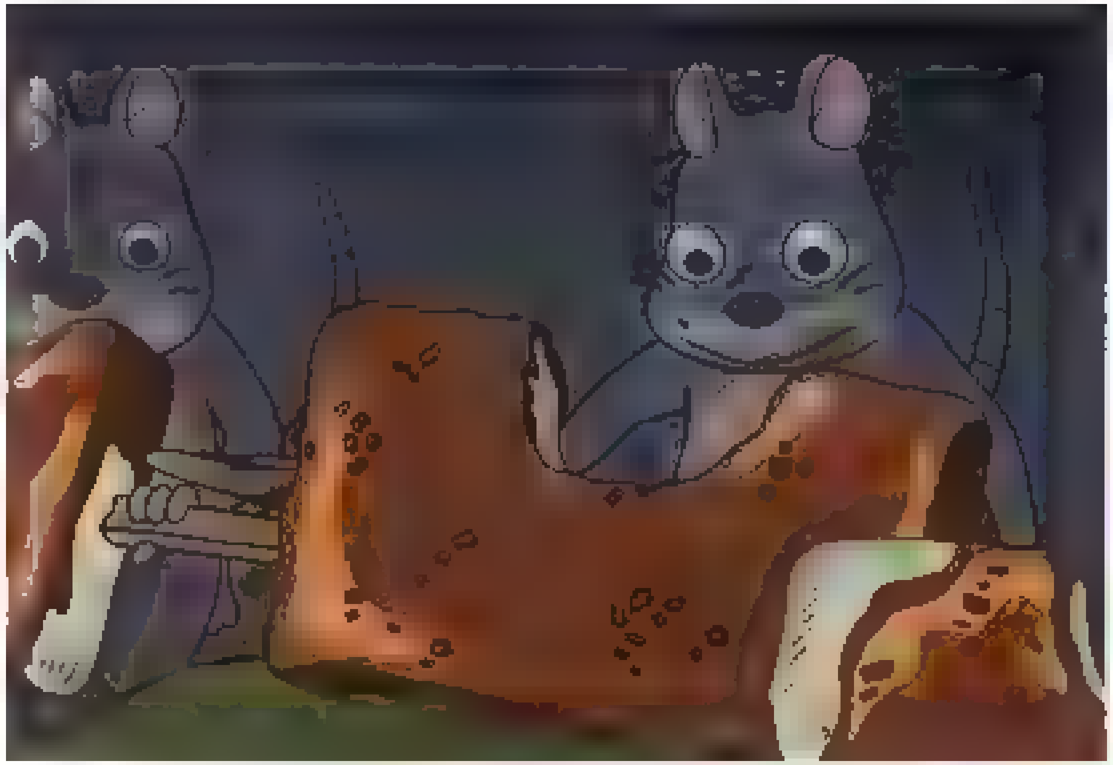
う〜ん。
投げとばされとるのは
ジイん家のねずみ共だ。

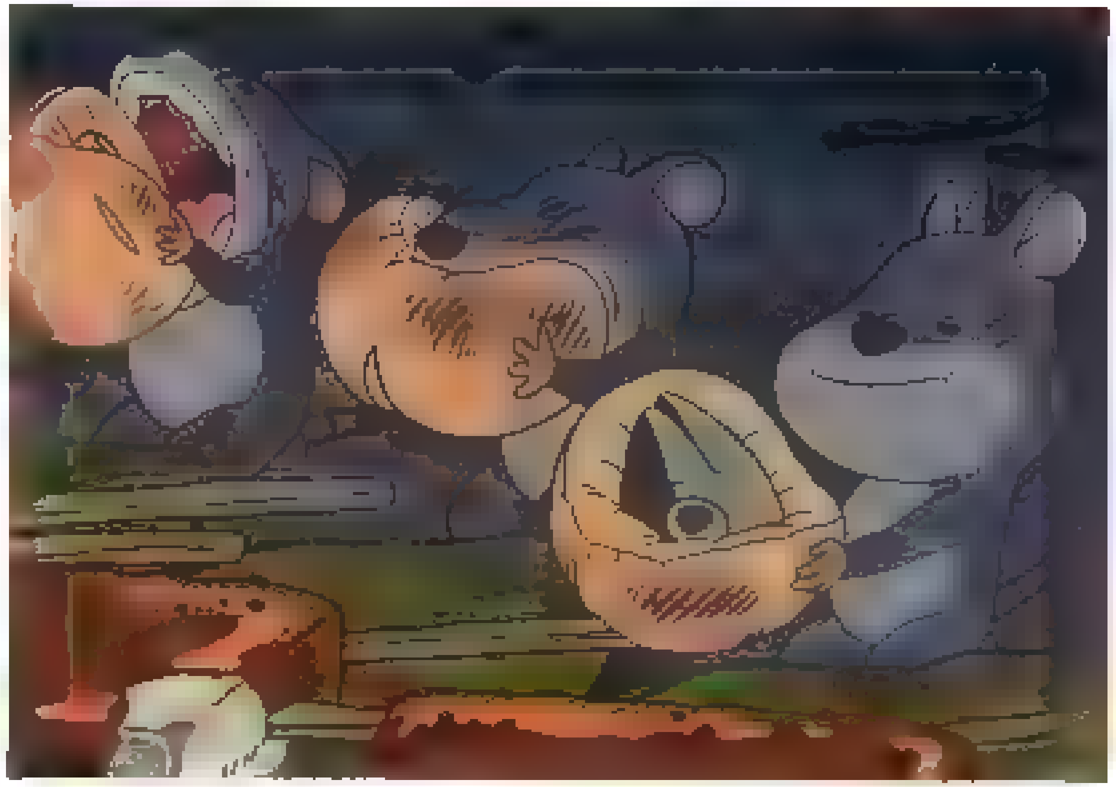
ジイとバアは、おおごちそうを作りはじめたのじゃった。

おいでー。
あがりあれ〜。

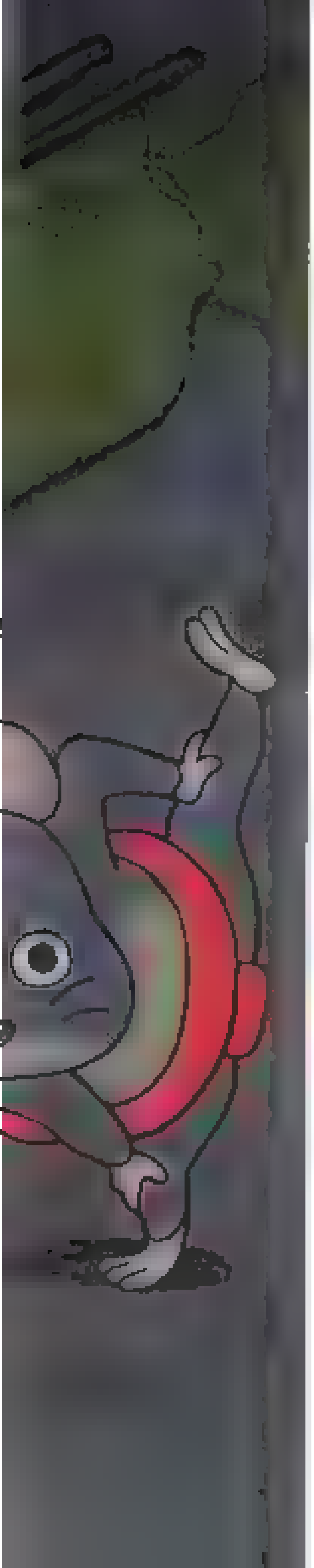
みんな、こんなにうまいごちそうは

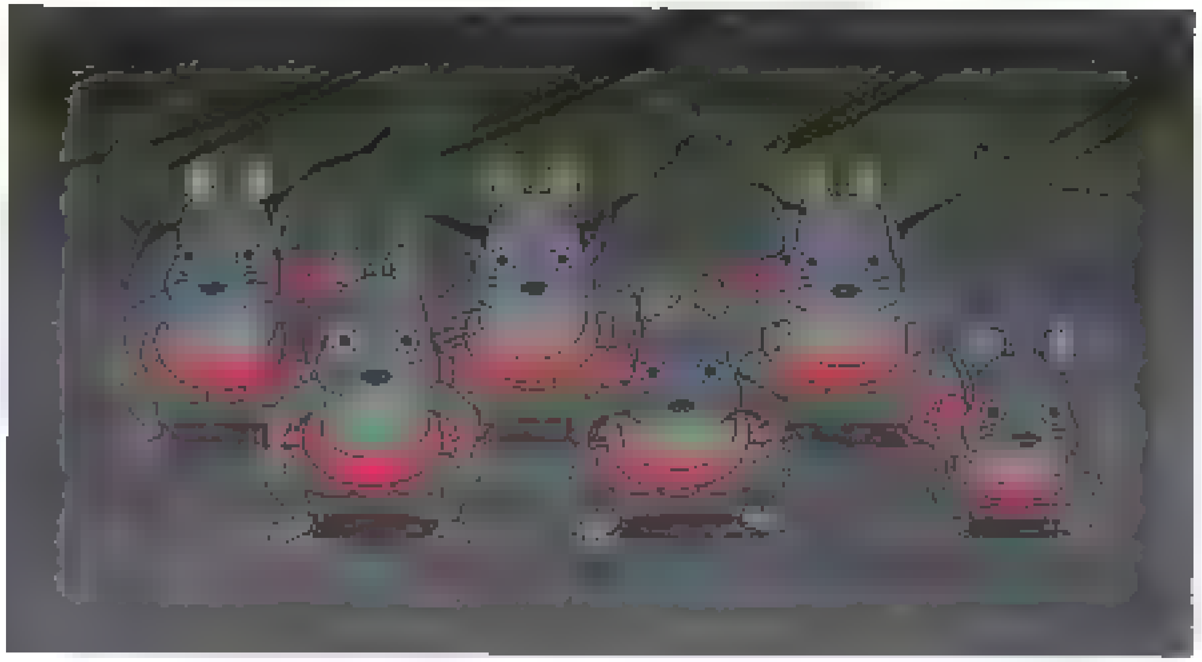


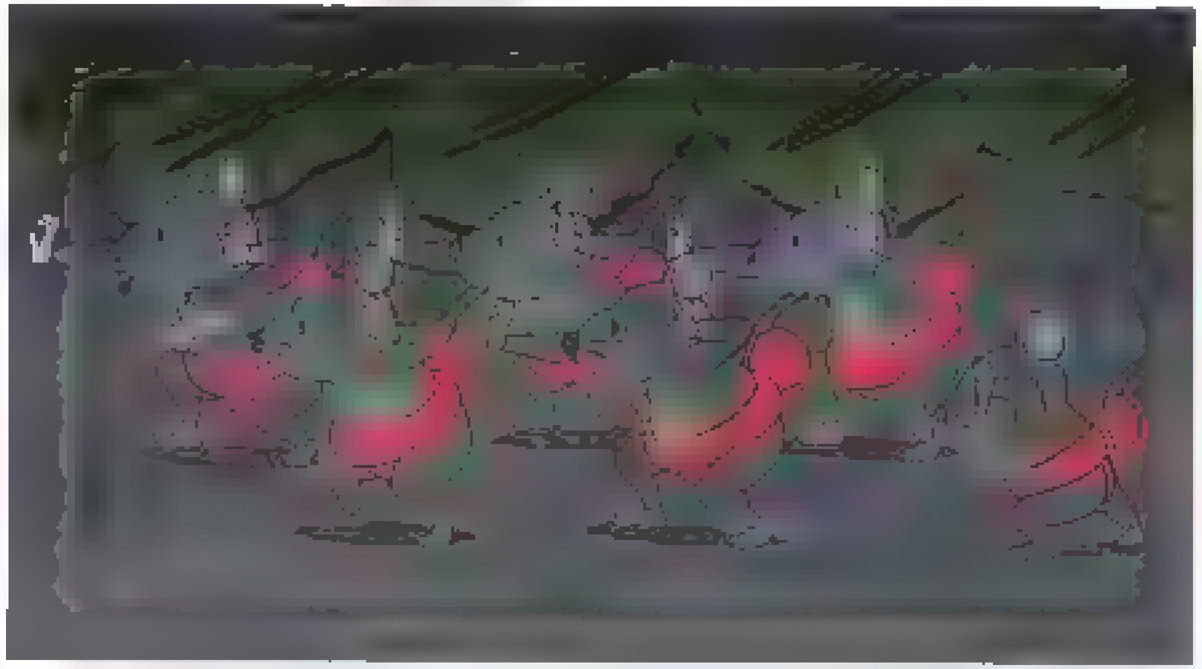


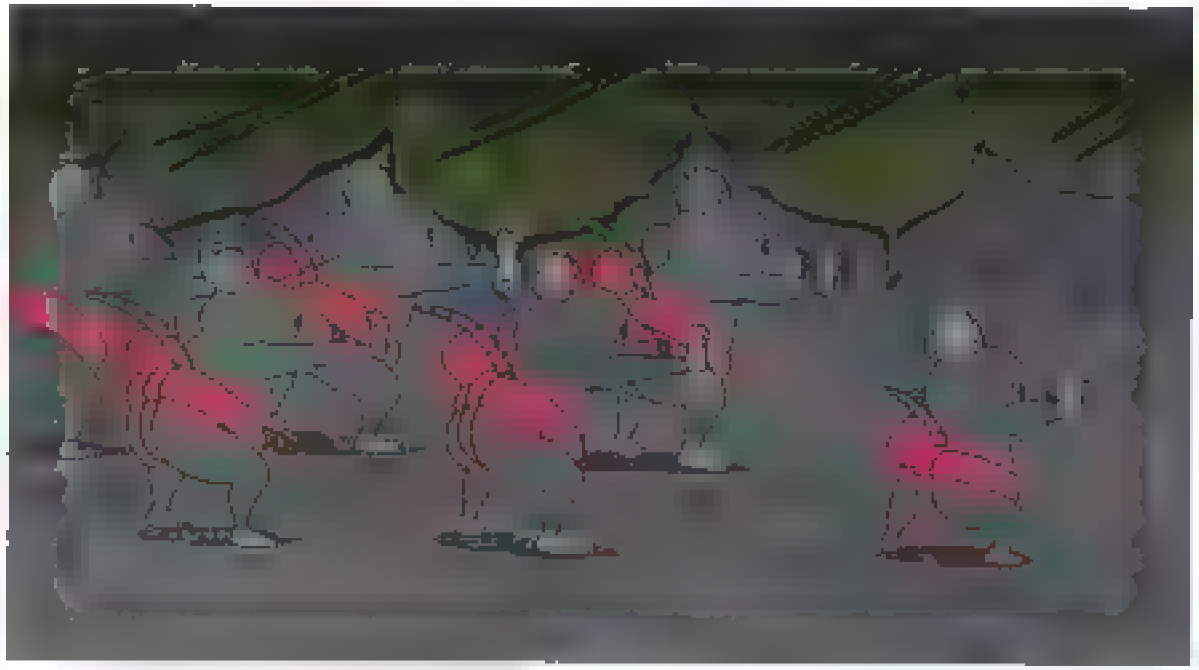


豆腐の田楽の味噌ダレには、
クルミのすったものが入っていたし、
そばダンゴの中の、サンマの脂の
あまいこと。

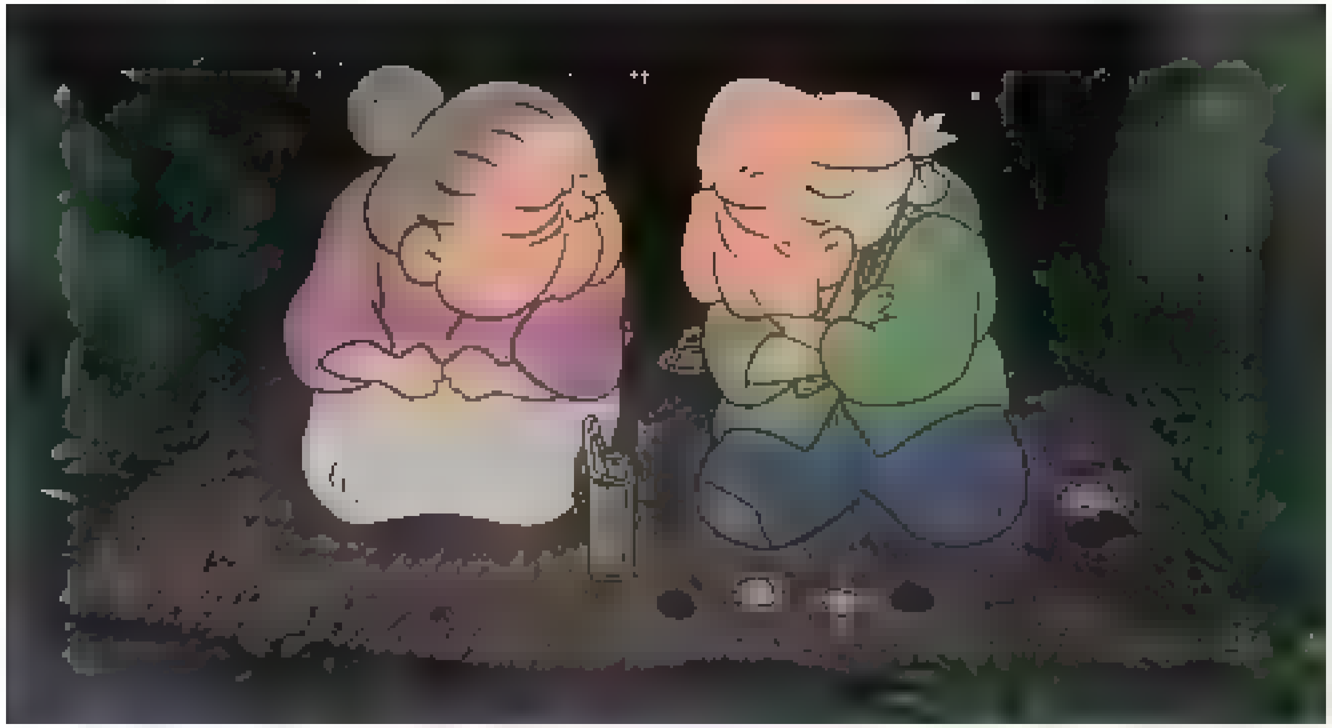


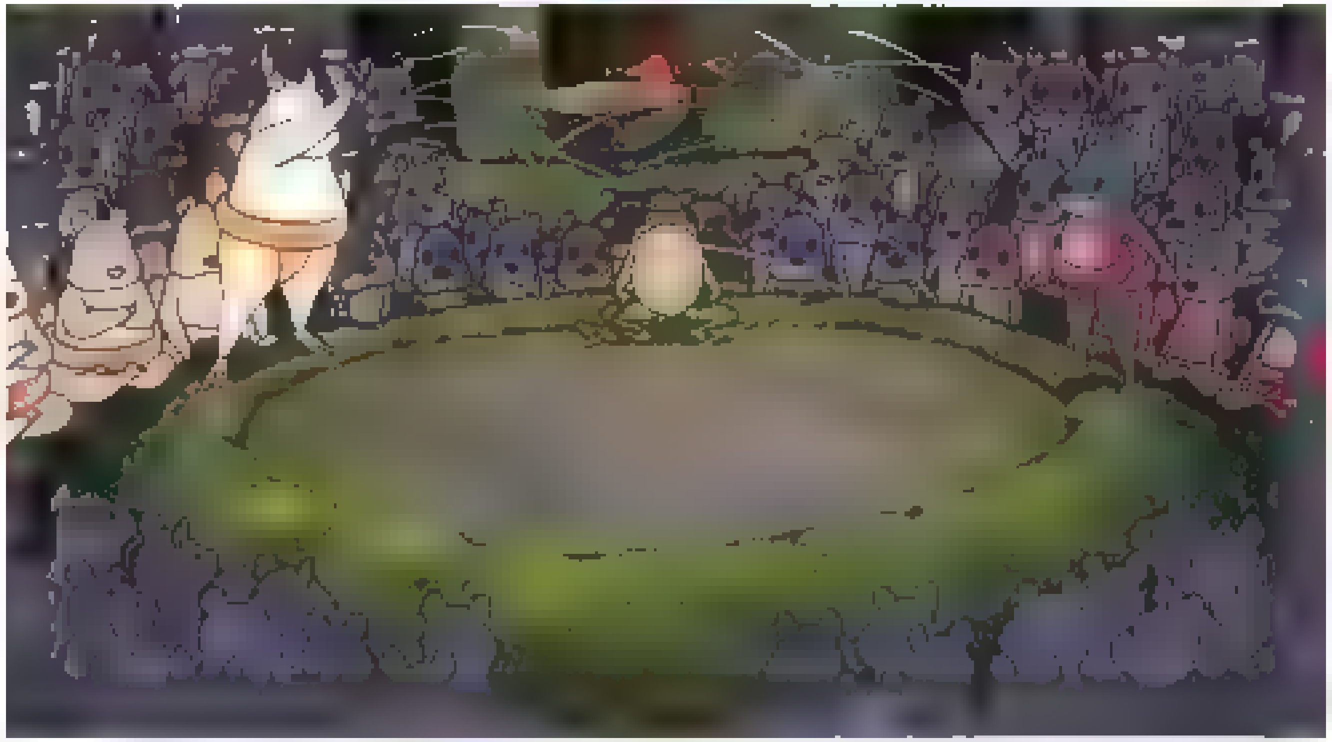






みーんな腹いっぱいに食べて、
力がズンズンついていくようだったと。



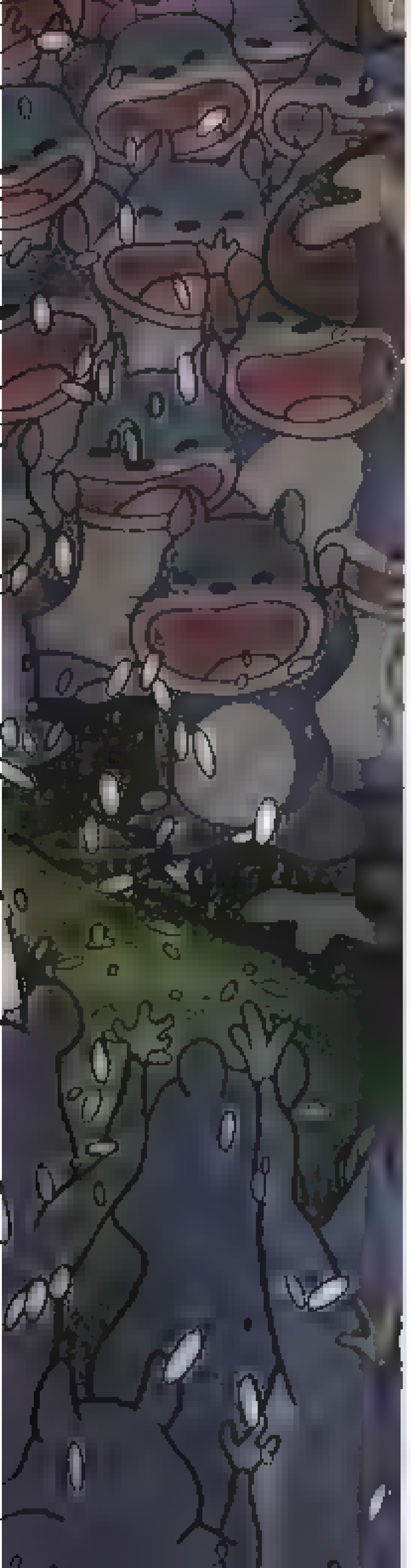


ふうむ……五分と五分ではねえか…。
いよいよ結びの一番じゃ〜。

水が入ったぁ!!

サンマだ…、サンマのダンゴだ…。
あれは力がつくぞ〜。

ハハハハ
ワ〜ハハハ

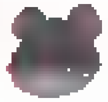


好きな絵本を何回も読むように、この映画を繰り返し観て欲しい

● 語り ●

阿川佐和子

Sawako Agawa

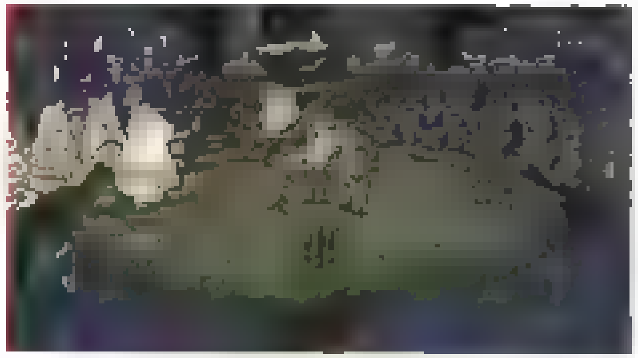


東京生まれ。慶應義塾大学卒業。報道番組のキャスターを務めた後に渡米。帰国後、エッセイスト、小説家として活躍。99年、「ああ言えばこう食う」(檀ふみとの共著)」(集英社刊)で講談社エッセイ賞を、「ウメ子」(小学館刊)で坪田譲治文学賞を受賞。2008年には「婚約のあとで」(新潮社刊)で島清恋愛文学賞を受賞した。その他の著書は「恋する音楽小説」(講談社刊)、「スープ・オペラ」(新潮社刊)、「ギョットちゃんの冒険」(大和書房刊)など多数。

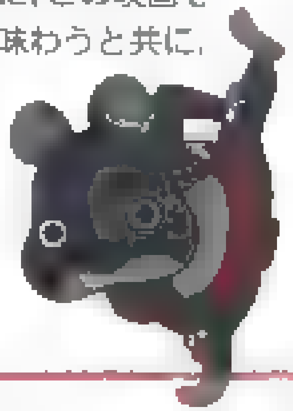
私、去年はものすごくねずみと縁があったんですよ。まず、干支がねずみ年でしょ。その上、軽井沢の山の中に別荘というか、掘建て小屋があるんですけど、そこに1年ぶりくらいに行ったらねずみのフンだらけ。そんなねずみ三昧な日々を過ごしている時に今回のナレーションのお話を頂きまして、子どもの頃、弟たちに読み聞かせをしていましたし、ナレーションの仕事も好きなので、すごく嬉しかったです。

台本を読み、映像を見せて頂いた時、ジイとバアが何も話さずにねずみたちのために料理を作りはじめるところとか、映像の力だけでここまで人を惹きつけて魅了させることができるということに驚きました。私もこの映画のジイとバアのように時々軽井沢で山の生活をしていますけど、やっぱり山の生活というのは、ねずみや虫、たぬきやサルなんかと共存して生活すべきなんだと痛感しましたね。人間は、動物たちが暮らす山の中に家を建てて後からやってきた新参者なんだから、お邪魔しますという気持ちを持って、お互い様という住まい方をしなければいけない。人間の便利さだけを追求した生活をしていると、悪いことをすると自分に返ってくるのと同じように、必ず何らかの形で返ってくるものがあるのではないかと思いました。

さて、この映画での私の仕事は、ただ物語を読むだけではなく、ジイの役もバアの役もやらなければならないことがわかり、小さい頃、声優になりたかった私でしたが、できるかしらと不安でしたね。事前に家で練習をしましたが、収録現場に行ったら「先生できません…」と言って泣いちゃいそうなくらい難しかったんです。収録は苦しみました。「自然に」と言われても何が自然なのかよくわからない。一つ一つのセンテンスをどういうトーンで出したらいいのか、イントネーションや語尾はどうしたらいいのか、考えすぎちゃったんです。「水が入った!!」っていうところはいろんなパターンを試しましたし、最後にジイとバアと、家じゅうが笑う声にも悩みましたね。ジイが立ち小便をした時にブルッてする時の声は経験がないんで想像するしかなく、やりながら一つ一つ勉強させて頂きました。



この映画には、「登ったりおりたり」とか「くだくだに、くたびれて暮らしておったと」とか、面白いリズムや音感、言葉がちりばめられています。好きな絵本を何回も読むように、この映画を繰り返し観て、映像の素晴らしさと物語のよさを味わうと共に、言葉や音の面白さを楽しんでもらえたら嬉しいですね。そしてこの映画が思い出の宝物になってくれたらいいなあと思います。



• 音楽 •

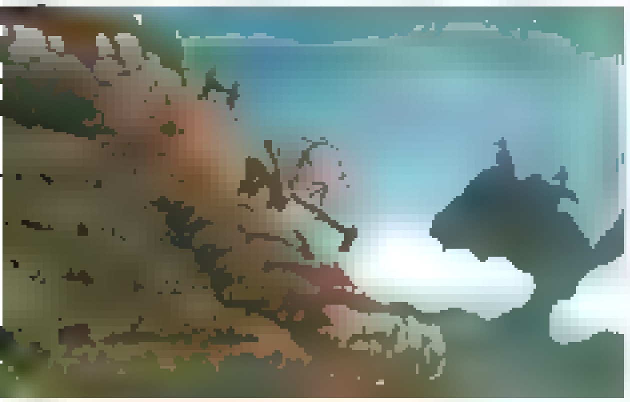
渡野辺マント
Manto Watanobe

上々颱風のメンバー(ドラムス担当)で、アレンジの中心的存在。軽快で気持ちの良いサウンドや複合リズムを作り出すことで高く評価されている。スタジオジブリ作品『平成狸合戦ぽんぽこ』(94年)では中心的役割を担った。また、個人として「ギブリーズepisode2」(02年)を手がけている。上々颱風初の絵本『ハラホロの涙』では渡野辺マント自身が画を担当している。2009年上々颱風は12枚目のアルバム「土民の歌」をリリース。

ジブリさんとの仕事は、スタッフの皆さんが絵を描く作業をしているのと同時進行で、僕も音楽作りをスタートしました。絵コンテを見ながらイメージ音楽を作るんです。このやり方は、作品全体の音楽イメージが膨らんで、自由に音楽を作れるのでとてもいいんですよ。

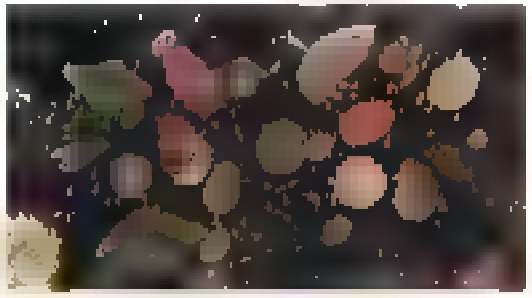
最初に絵コンテを見た時、今回の音楽は和風だと思いました。僕は打楽器奏者ですから、そこからいろんな楽器を叩きながらイメージしていきます。そうしてこれだと思ったものを監督の山下さんに聞いて頂き、それぞれのシーンについて話をしました。クライマックスのねずみの相撲のシーンと、エンディングに流れるこれまで聞いたことがないようなお祭り[illegible]の曲は、僕が最初にイメージしながら作った曲がもとになっています。

今回苦労したのは、冒頭のおじいさんとおばあさんの日常シーンの曲でしたね。監督から「退屈な音楽をお願いします」って言われたからです。退屈な音楽ってどんなだろうと、悩みつつ、和太鼓や日本の木琴のようなバラフォンというアフリカの楽器を使いながら、何にも面白いことのない暮らしを繰り返すおじいさんとおばあさんを思い浮かべていきました。



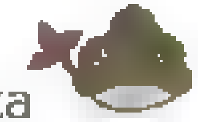
なぜアフリカの楽器を使ったのかというと、この映画の音楽イメージが和風だからといって、和楽器だけの音楽にしたら、音のイメージが決まってしまい、作品全体が小さくまとまってしまう。だったら和楽器以外の素朴な楽器を取り入れて、少しでもイメージを広げたかったのです。

最初のねずみの相撲の曲は、テレビの相撲中継の時に流れている音をイメージして、僕なりに作ってみました。おじいさんとおばあさんがものすごい勢いで料理を作るシーンは、監督の希望が「ねずみたちになんとか相撲で勝ってもらいたいという気持ちから、おじいさんとおばあさんが急に気持ちが若返って、普段より元気に動いている感じを出したい」ということだったので、6拍子で、韓国のリズムを少し混ぜてみたんです。これも音楽のイメージが広がった面白い曲になりました。ねずみたちがご馳走の前に並ぶシーンの曲は、完成した映像を見ながら、神聖な感じと、張りつめた空気を大事に、歌舞伎の音楽をイメージしながら滑稽さを出したつもりです。



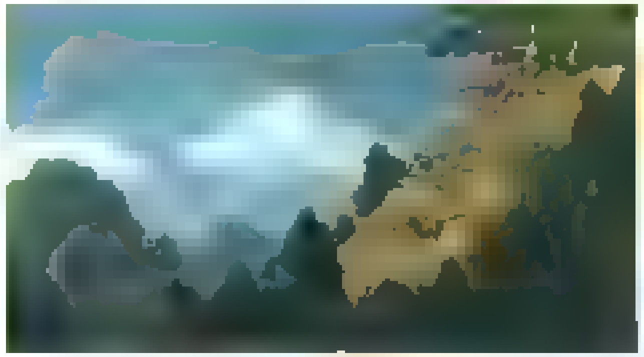
この映画は、短い中にものすごいドラマが詰まっています。おじいさんとおばあさんがねずみに何かをしてあげるというより、親が子どもに何かしてあげているような感じがありました。そして、物語は「愛」に溢れている!! そんな映画に、少ない楽器で、全体にシンプルな、打楽器奏者の僕らしい音楽をつけられて、とても幸せです。ありがとうございました。

• 絵コンテ・監督 •



山下明彦
Akihiko Yamashita

アニメーションならではのおもしろい動きにこだわりました



• 美術監督 •

田中直哉
Naoya Tanaka

柔らかい雰囲気の中に深みを出せたのではないかと思っています

僕は今回の作品づくりのテーマを、登場人物が一所懸命何かをやっている様を滑稽に見せることと、目的を持てば元気になるということを描くことに据えました。というのも、ラストで相撲の勝ち負けに関係なく、「いい勝負ができた!!」と、負けたねずみたちも一緒になって笑わせることが、この映画の最終目的だったからです。

この想いを念頭に作業を進めたのですが、ねずみが一群となって動くあたりは、思いのほか苦労しました。ジイとバアの作った料理が並んでいるところに、ねずみたちが出てくるシーンを、「うまそうな物がある」とワラワラ集まってくるという風にしていたら、「ねずみに対する考え方を変えてください。この人たちを礼儀を知っている侍と思ってほしい」と宮崎駿監督から指摘を受け、それならばと、ねずみに神妙な武士のような立ち振る舞いをさせました。

また、ジイとバアの関係性では、ジイとバアが会話もしていないのに二人でいきなり料理を作り始めたり、ジイが丸一日かけヘトヘトになって買ってきたサンマを、バアがサッと持ち去ってしまうなど、長年連れ添った夫婦らしさを出すといった要素を演出に盛り込み、面白く表現できたと思っています。

この作品では、演出面では僕自身本当に勉強になりました。宮本常一の本を読んで人々の暮らしの多様性を知り、下栗(長野県)でのロケハンでは急斜面の畑を知り、サンマダンゴを食べた時にでる「サクッ」という音や食感を知りました。

舞台設定作りでは、その場のたたずまい、ディテールの積み重ねが大切で、気分だけで作っちゃいけないんだということを学び、絵コンテを描く時には、自分の愛着や、描きたいという想いだけでシーンやカットをムダに増やさないこと、テンポと、その場その場の面白さが大切なんだということを実感しました。シナリオに書かれていない部分をどう演出するかが監督の仕事なのだということも改めて知りました。

キャラクターの動きの面では、自分の持ち味を出せたと思います。全てのキャラクターを設定通りに描かないようにしました。カットごとに顔も体型も伸び縮みして、ありえないような動きをさせて、アニメーションならではの面白さを出しています。理屈じゃない、アニメーションの楽しさを堪能してもらいたいです。「ちゅうずもう」は僕にとって、本当に良い経験になりました。

今回は、映画の舞台となる背景世界を作る際、山で暮らすジイとバアの生活様式の表現が難しかったですね。当時の農民の家はどんな造りで、軒の深さや屋根の大きさはどうだったか、普段何を食べ、畑で何を育てていたのかなどなど……。自分の知らない世界だったので、宮崎さんの勧めで長野県の下栗にロケハンに行ったり、「小平ふるさと村」というところで移築した古い民家を見たりして、勉強するところからはじめました。

ロケハンで行った下栗は、この映画の冒頭に出てくるジイとバアの畑のような、ものすごい山の急斜面にたくさんの畑があって驚きました。その畑を実際に歩き、じゃがいも畑を営むご夫婦に話を伺い、斜面が急すぎるので掘ったじゃがいもをうっかり落っことすと、あっという間に山の下の方まで落ちて行ってしまうことなどを教えて頂き、とても参考になりましたね。

映画に登場するサンマのダンゴも下栗で初めて目にした食べ物でした。そばダンゴの中に塩漬けのサンマを頭からぶつ切りにして入れ、囲炉裏でじっくり焼いていくんです。

生臭さがなく、外は香ばしく、中のサンマはふんわり。とてもおいしいんです。ジイとバアの料理のシーンでは、お[illegible]ごちそうを作ってゆく課程で、朝から昼、夕方から夜になり丸一日奮闘しておおごちそうが出来上がって行く情景を、うすぐらい部屋の中の囲炉裏の火がちろちろと燃える様子とともに描いたつもりです。

ジイとバアの家は、どれだけ生活感にリアリティが出せるかということが重要でしたね。それこそ背景画から家の匂いが漂ってきそうなところを狙ったのですが、なかなか表現しきれなくて苦労しました。実際、調べると、昔は家の近くに厠があって、常に強烈な匂いを放っていたでしょうし、そんなに綺麗なところじゃなかっただろうということもわかりました。寝る時だって、ワラ布団にもぐっていたでしょうし、そこにはダニやシラミもいたことでしょう。けれどもそういったことを全てそのまま背景として描くのではなく、知識としてわかった上で、そういう感じをどう雰囲気として醸し出していくか。それが今回の最大のテーマでしたから。

その意味では試行錯誤の連続でしたね。でもそうして出来た背景の世界は、柔らかい雰囲気の中に深みが出せたのではないかと思っています。また、短い物語の中で目まぐるしく時間が変わっていく感じもうまく出せたと思っています。特に囲炉裏の周りのシーンは、早朝、夕暮れ時、夜と、同じ場所なのに時間の変化がちゃんと楽しめるようになっていますので、そういったところまで見て頂けたら嬉しいです。

スタジオジブリ作品

<声の出演>

語　り　阿川佐和子

水田わさび　進藤尚美　梅田貴公美　日比愛子
中川里江　矢澤喜代美　庄子裕衣　足立　友
山口享佑子　中村知子　内山典子　粟原由紀子
沢井エリカ

<スタッフ>

企画・脚本　宮崎　駿
原　作　日本民話より
絵コンテ・監督　山下明彦
音　楽　渡野辺マント
制　作　スタジオジブリ
プロデューサー　鈴木敏夫

作画監督補　近藤勝也　中村勝利
原　画　田中敦子　山田憲一　芳尾英明　松尾真理子
古屋勝悟　鈴木麻紀子　田村　篤　佐藤雅子
高橋もよ　石角安沙美　三浦智子　大塚伸治
山川浩臣　東　裕子

動画チェック　鈴木まり子
動　画　舘野仁美　手島晶子　中込利恵　斎藤昌哉
大村まゆみ　アレキサンドラ・ワエラウフ　山田伸一郎
今野史枝　檜垣　恵

谷平久美子　山浦由加里　中里　舞　金子由紀江
中西雅美　小山正清　福井理恵　大谷　茜
中野洋平　田名部節也　高村和宏　岩上由武
西尾祐介　富山沙瑞奈　大橋聡人　西河広美
伊藤かおり　清田万里子　下地彩加

動画協力　アニメトロトロ　中村プロダクション
スタジオたくらんけ　エー・ライン

美術監督　田中直哉
背　景　春日井直美　芳野満雄　渡邊洋一　矢野きくよ
デジタル特効　糸川敬子

色指定　田村雪絵
デジタルペイント　森　奈緒美　山田和子　古城理恵　松島英子
高橋広美　石井裕章　斎藤純也

デジタル撮影監督　薮田順二
デジタル撮影　田村　淳　芝原秀典　三好紀彦　奥井　敦

音響監督　百瀬慶一

リレコーディングミキサー　佐藤忠治

サウンドエディター　坂口由洋
高野寿夫　木内美由紀
ダビングスタジオ　mediarte富ヶ谷スタジオ
石坂紘行

光学録音　NT Audio
dtsマスタリング　宇田川浩一　相川　敦
ドルビー・フィルムコンサルタント　河東　努　森　幹生

演　奏　渡野辺マント　後藤まさる　丸山史朗
音楽制作マネージメント　トエラ
岸　健二郎
音響制作協力　ミディアルタ エンタテイメントワークス
dts Japan
コンチネンタル ファーイースト

編　集　瀬山武司　亀川桂子　佐々木紘美

制作担当　渡邊宏行
制作デスク　三吉弓子
制作進行　伊藤修平
ポストプロダクション　古城　環　津司紀子
演出助手　居村健治

現　像　IMAGICA
タイミング　平林弘明　上野秀弘
フィルム・レコーディング　天野　匡
カラー・マネジメント・システム　松本　渉
ラボ・コーディネーター　佐藤祐梨子

© 2010 Studio Ghibli

発行日 2010年1月1日　初刷
発行人:中島清文　発行所:財団法人徳間記念アニメーション文化財団　東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集:今西千鶴子　アートディレクション:原 美恵子[東宝アド株式会社]　デザイン:倉田ひさみ[東宝アド株式会社]　編集担当:小林一美　編集協力:安西香月
協力:株式会社スタジオジブリ　印刷・製本:図書印刷株式会社　プリンティングディレクター:[illegible]　定価:400円(税込)

1MCFA-028 400
4 571101 919769